

広島県教育委員会平成28年度教員長期研修成果報告

日常的な関わりにおける効果的な教育相談

—カウンセリングの技法を活かした叱り方の工夫—

河村哲志¹

問題

教育相談の意義

教育相談とは、生徒指導提要（文部科学省，2010）において「児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長を図るもの」と定義されている。また、中学校学習指導要領解説（特別活動編）（文部科学省，2008）によると、「教育相談は、一人一人の生徒の教育上の問題について、本人又はその親などに、その望ましい在り方を助言するものである。その方法としては、1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かし、教育相談的な配慮をすることが大切である」とされている。近年、社会の変容の中で不登校、いじめ、問題行動等、児童生徒の抱える不適応問題は多様化・深刻化し、様々な要因が絡み合っており起きていることが多くなっている。また、ストレスを抱え込みやすく、自力で適切に対処できないために不適応行動に陥る児童生徒も増加している。

このような状況のなか、学校が行う教育相談の利点として生徒指導提要では、①早期発見・早期対応が可能、②援助資源が豊富、③連携がとりやすいことを挙げている。また、福田・名島（2011）は、「教師間の連携によって生徒の情報を共有することができること」と「一人の生徒に対して様々な教師が多様な関わりを持つことにより多面的な理解ができること」も利点としている。つまり、教育相談とは特定の教師だけが行うのではなく、すべての教師が個に焦点を当て、その個に携わる人や機関が情報を共有し連携することによって、児童生徒や保護者などに望ましい在り方を助言し、児童生徒の内面の変容を図ろうとするものであり、教師には児童生徒の不適応問題をできるだけ早期に把握して深刻化させないための効果的な指導・対応が求められている。そして、児童生徒の悩みやストレスを解消することは、問題行動の未然防止につながると同時に、教師と児童生徒の信頼関係が構築されることにもなると考えられる。

カウンセリングの技法を活かした叱り方

児童生徒の不適応行動に対応する方法として、学校現場に「カウンセリングマインド」という言葉が定着するようになった。牟田（2007）によると、1995（平成7）年に文部省（当時）の施策に

¹ 三次市立八次中学校

より、学校教育相談の場面でカウンセラーが行う「受容・傾聴・共感」といった考え方・聴き方が徐々に浸透していった。また、橋元（2012）は児童生徒の不適応行動に対し、より効果的な対処方法を求めて試行錯誤を続ける教師に最も求められているのがカウンセリングの技法であると述べている。一方で①言い聞かせたり、説教したり、説得したりする、②児童生徒の家庭での日常生活の改善を指導する、③命令的・指示的に対応する、④叱咤激励して、やる気を起こさせように対応する、⑤教え、諭したり、指導的な対応をする、⑥評価的、批判的に対応する、⑦審判的である、⑧忠告的である対応は、カウンセリングのようであっても「カウンセリングではないもの」と述べている。しかし、教師は「教える」、「指導する」という日常の教育場面において、上記①～⑧の対応もしなければならない。そして、教師は児童生徒を正しい方向へ導くためには、不適応行動に対して注意や叱る等の厳しい教育的指導をしなければならない。

上地・西山（2003）によると「昨今の生徒指導において、どちらかと言えば子ども中心の寛容な教師態度が優先し過ぎて、子どもの言動への許容度（自由度）が大きく増幅した感があり、結果的にどのようなことをしても許されると子どもたちが思い込み、罪悪感を持たずに問題行動へ走る子どもが続出している。これは生徒指導における、厳格な教師態度の後退にその一因があると理解される」と述べている。その理由として「厳格な指導」として体罰をイメージすることが多く、また、体罰以外に適切で厳格な指導を行使できないことが考えられる。また、教師が叱り方に困難さを感じ、自信が持てないことも考えられる。しかし、適切に子どもを叱ることは、子どもを正しい方向へ指導する上で不可欠であり、また上地・西山（2003）は「叱る指導」によって①子どもへの関心の証しとして、②罪悪感と良心を育む、③規律を守る精神を育む、④怖い人間の存在を知り、畏敬の念を育むといった教育的意義が期待できると述べている。そして、叱ることを生徒指導に有効に生かすためには①叱る子どもへの関心と愛情が伴っているか、②叱る根拠が明確か、③確固たる教育理念に基づいて叱っているか、④言動を叱って、人を叱らないように心がけているか、⑤叱る以上に褒めているか、⑥カウンセリングマインドに徹して叱っているかがポイントになると述べている。児童生徒は教師に叱られることによって気分が沈むことが多い。その時、子どもの気持ちへ共感し、叱りながら児童生徒の心痛を共有することが重要となる。

教育相談と生徒指導の関連について生徒指導提要（文部科学省，2010）では「教育相談は生徒指導の一環として位置付けられる」ものであり、「生徒指導は一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことと定義され、生徒指導は主に集団に焦点を当て、集団としての成果や変容をめざし、結果としてこの変容にいたることを目的にしていることに対し、教育相談が個に焦点を当て、内面の変容を図ることを目的としている」と述べている。また、加勇田（2000）は「教育相談と生徒指導という二つの言葉が対立的に用いられることが多く、教育相談の普及を妨げている。教育相談的方法とはロジャーズの自己理論だけが強調され、生徒を甘やかすという非難を受けてきた。しかし、カウンセリングの技法は受容と共感という受動型の技法だけでなく、積極的に問題解決を目指す能動的な技法もあり、能動的な技法の中には生徒指導的なものも含まれる」と述べている。つまり、教育相談と生徒指導は児童生徒へのアプローチの違いはあるが、共通の目的を持っているという点から教育相談で

用いられるカウンセリングの技法は生徒指導の「叱る」場面にも活かすことができるものと考えられる。

本研究では、教育相談だけでなく不適応行動に対して「叱る」場面においても「受容・傾聴・共感的理解」などの教育相談のスキルを取り入れることによって、教師と生徒の信頼関係が構築された中で指導が行われ、生徒自身が自らの課題に気づき、解決していく力を伸ばすためのサポートができることを目的とする。

所属校の現状

筆者の所属校は、平成 28 年度生徒指導実践指定校の指定を受けている。校務運営組織の生徒指導の中に「教育相談係」を位置づけ、教育相談係会での情報共有、関係機関連携、生活アンケートの実施と定期的な教育相談を実施している。数年来、問題行動や不登校の生徒指導上の課題があったが、日々の教育相談や問題行動における組織的で毅然とした対応により、近年は問題行動の件数は減少した。一方で、基本的な生活習慣や規範意識の醸成等、家庭の教育力が低下傾向にあり、人間関係づくりがうまくできない生徒、社会性が身につけていない生徒が少なくない。そのため、友人関係のトラブルで悩み不登校傾向になる生徒が増加し、問題行動については特定の生徒が繰り返している。そのような生徒に対して生徒自らが課題に向き合い、問題を解決しようとする場面において、教師は生徒を叱ることも必要になってくる。しかし、その場面で、教師はどのようにすれば生徒自身が自分の誤った行動に気づき、変容していくのかについて悩むこともある。

本研究の目的

本研究では、教育相談や生徒指導の場面での教師の具体的な対応や悩みに焦点を当て、生徒が自分自身で問題を解決するような導き方をするうえでの課題を探るため、所属校と近隣の中学校の教師にアンケートを実施し、教育相談の場面で意識していることと実際に効果があった対応、また、教育活動にとって必要不可欠である「叱る」ことについて、教師は生徒のどのような言動に対してどのような叱り方をするのか、また「こうすればよかった」と後になって思ったことなどを調査する。そして、その上で、生徒が教師の思いを理解し、自分自身で問題を解決していくための効果的な指導・支援の在り方を考えていくことを目的とする。

方法

調査対象者 所属校教職員 16 名，協力校教職員 34 名（管理職，養護教諭含む），計 50 名。

調査時期 平成 28 年 12 月 1 日に調査用紙を配布し，1 週間の回答期間の後，回収した。

調査内容 以下の 5 項目について，質問紙調査を行った。

- 問 1 教育相談の場面での対応と教育相談の技法を活用して効果的に行われた事例【10 項目 4 件法，自由記述】
- 問 2 日常における「叱る」場面と叱り方【8 項目，4 件法，複数回答】
- 問 3 日頃の教育活動の中で「叱る」と教育相談の技法を織り交ぜた対応をするうえでの難しく感じることやその難しさに対する工夫【自由記述】

問4 生徒を叱った後のフォローと「こうすればよかった」と思った事例【3項目, 4件法, 複数回答, 自由記述】

問5 フェイス項目 (性別, 教職経験年数)

結果

調査対象者の属性

対象者のうち男性が31人, 女性が19人であった。また, 教職経験年数で見ると, 1～5年の対象者20%, 6～10年の対象者16%, 11～20年の対象者16%, 21年以上の対象者48%と経験年数21年以上の対象者が約半数を占めていた。

教育相談の場面での対応と効果的な事例

教育相談の場面における対応を図1に示した。教育相談の場面で, 教師はカウンセリングの技法を活用して生徒の話を聞こうとしていることがわかった。特に「うなずいたり, 相づちを入れながら聴いている。」では, すべての教師が意識して行っていた。一方, 「生徒を椅子に座らせて話を聴いている。」の項目で20%の教師が「あまりあてはまらない+あてはまらない。」と回答していた。これは教育相談が「学校のあらゆる場面で行われる」という点から, 例えば部活動や休憩時間の教育相談も含まれているため椅子に座らせない状況が多い。また, 「生徒の言葉や感情を受け入れようとしている。」の項目では「あてはまる」と「あまりあてはまらない+あてはまらない」の割合が同じであった。カウンセリングの技法が効果的であった事例を表1に示した。より効果的に行われた教育相談の具体例について, 教育相談の場面とそれまでの取組に大別することができた。実際の場面では「話を最後まで聴く」, 「話を聴くときに意識して活用する方法」に分けられ, それまでの取組では「日頃の人間関係の構築」を意識して行うことによって教育相談の効果が上がったという回答があった。

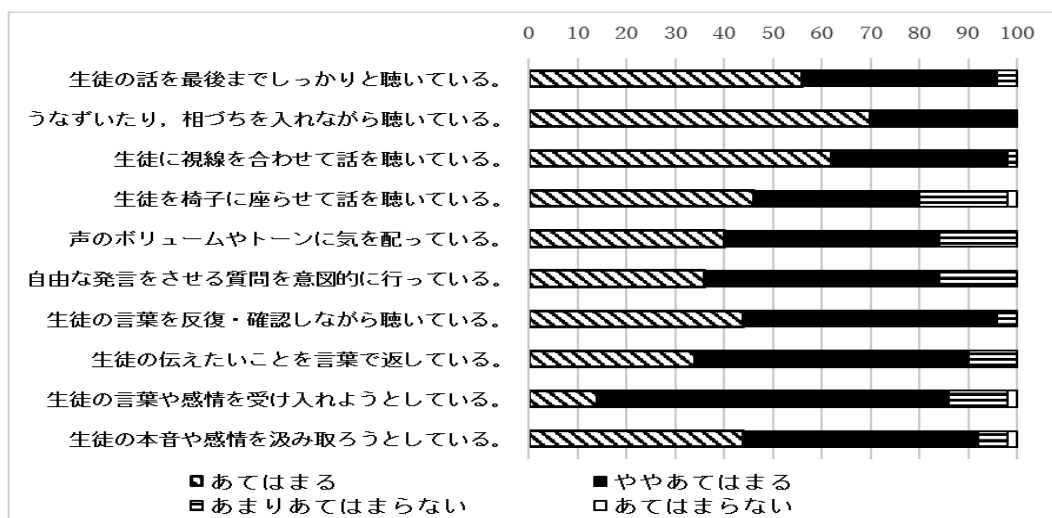


図1 教育相談の場面における対応 (%)

表1 カウンセリングの技法が効果的であった事例

カテゴリー	具体例
話を最後まで聴く	<ul style="list-style-type: none"> ・時間に余裕がある時は生徒の話を最後まで聴くようにしている。その結果、些細なことでも話をしてくれる生徒が増えた。(男性：教職年数1～5年) ・最初に生徒の思いをすべて聴いてから「良い点」、「改善点」を考えさせた。(男性：教職年数6～10年) ・話をしっかり聴いてやることで日頃の相談、悩み事を隠さずに話をしてくれる人間関係が築けた。(女性：教職年数6～10年) ・まずは否定せず、話を全部聴く。(女性：教職年数11～20年)
話を聴く時に意識して活用する方法	<ul style="list-style-type: none"> ・いきなり核心の質問をするのではなく、何気ない会話から始めることによって生徒は「話しやすかった」と言ってくれた。(男性：教職年数1～5年) ・出来事を図やイラストで表しながら生徒の話を聴くと事実確認しやすかった。(男性：教職年数21年以上) ・うなずきや相づちを入れて聞いた時。(女性：教職年数1～5年) ・生徒の発言を意図的に繰り返すと有効であった。(男性：教職年数21年以上)
日頃の人間関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩時間にできるだけ他愛もない話をして声をかけるようにしている。特に目立たない生徒には積極的に声をかけることを意識している。そうすることによって、その生徒が困っている様子の時も話しかけやすい。(女性：教職年数21年以上) ・休憩中の姿や何気ない仕草を覚えておき、その姿を生徒に伝えると驚く。(男性：教職年数11～20年) ・不適応行動や悩み等の相談の場面に対して、日々、生徒と積極的にコミュニケーションをとることで準備をしておく。(男性：教職年数11～20年)

日常における「褒める」あるいは「叱る」場面とその方法

教師は毎日必ず生徒を褒めており、1日に褒める回数は1～5回が56%と最も多かった(図2-1)。また、生徒を褒める時、教師は「生徒全員の前で褒める」、「例え失敗してもその過程を褒める」などの配慮をしていることが明らかになった(図2-2)。

叱ることについては、1週間で叱る回数は1～5回が40%と最も多く、次いで10回以上が32%であった(図2-3)。一方で、まったく叱らないと回答した割合は6%であった。また、生徒を叱る時は個別に呼んで叱ることの方が多かった。次に、生徒を叱る時の叱り方を表2に示した。「生徒の反応や表情の変化に注意しながら叱る」が66%と最も多く、「生徒の話を聞いてから叱る」が40%、「気づきを促すような質問をしながら叱る」が42%であったのに対して、言い分を聞かずに叱るは6%と少なかった。また、丁寧な言葉遣いで叱るが34%、厳しい口調で叱るが38%と相反する叱り

方がほぼ同率であった。

教育相談と「叱る」ことの関係

教師が生徒を叱る場面について表3に示した。教師が生徒を叱る場面では人を傷つける言動が圧倒的に多かった。授業中の私語や妨害等、人に迷惑をかける言動や社会で通用しない行為も多かった。

教育活動にとって「叱る」ことはすべての教師が必要不可欠であると考えている。しかし、「教育相談の中では生徒を叱ってはいけないと思う」という設問では「あてはまる+ややあてはまる」と「あまりあてはまらない+あてはまらない」とほぼ半数に分かれた(図3-1)。また、男性教師は「あてはまる+ややあてはまる」が66.7%であったが、女性教師は「あまりあてはまらない+あてはまらない」が73.4%と男女で対照的であった(図3-2)。特に、男性では経験年数21年以上で「あてはまる+ややあてはまる」が72%と最も高く、女性では「あまりあてはまらない+あてはまらない」の割合が経験年数11~20年で80%、21年以上で78%と高かった(図3-3、図3-4)。

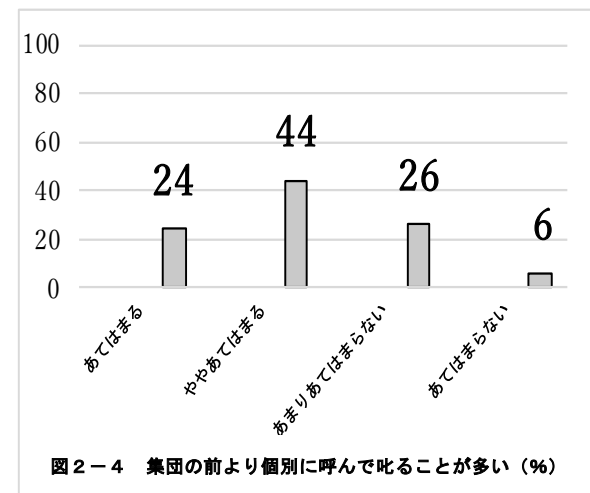
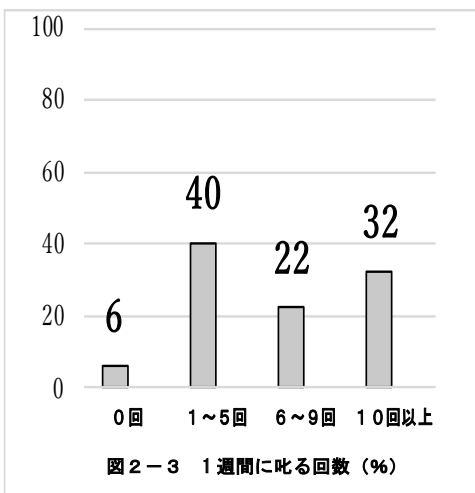
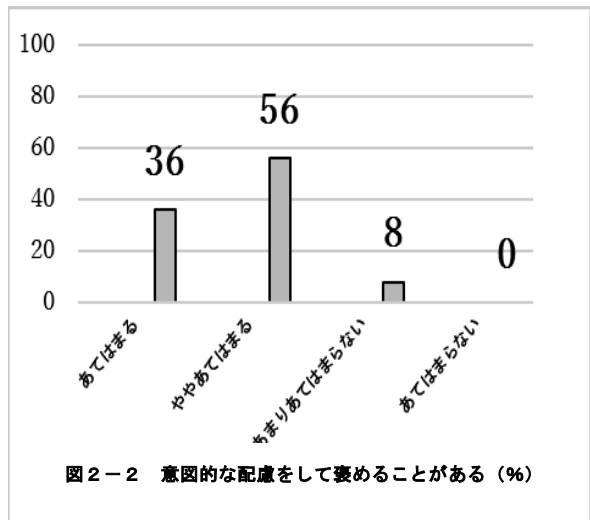
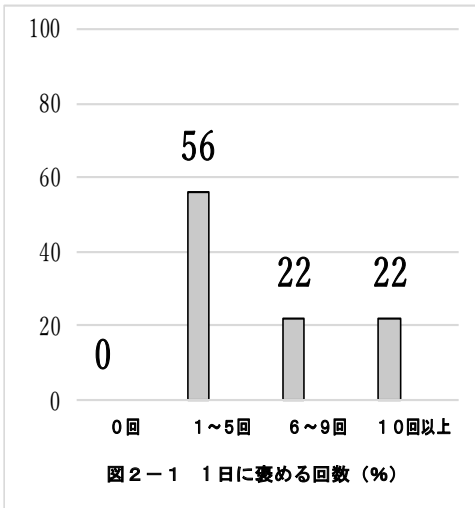
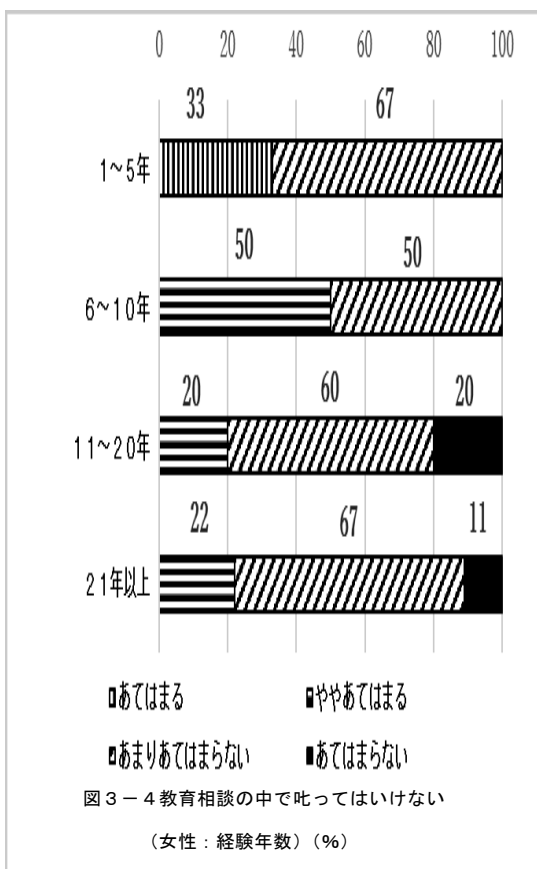
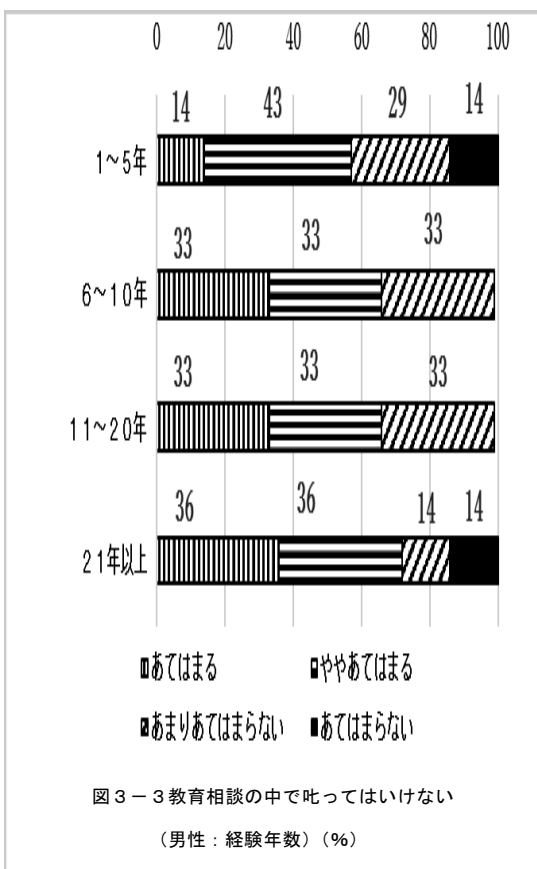
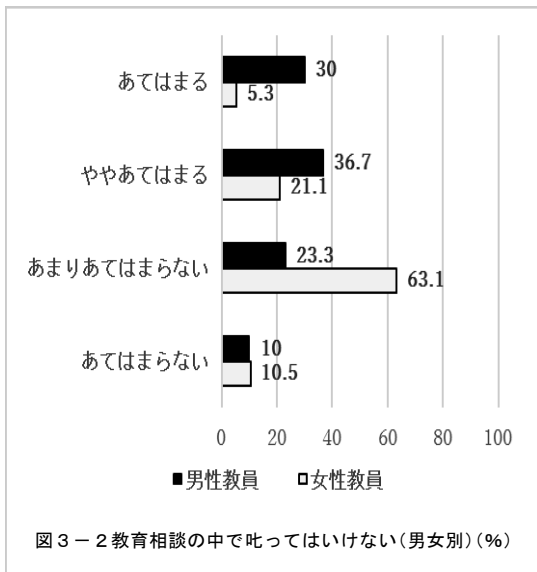
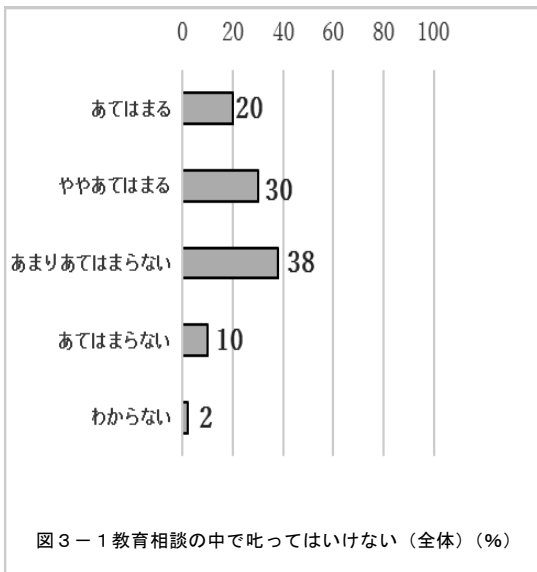


表2 生徒を叱る時の叱り方

具体的な叱り方	(%)
生徒の反応や表情の変化に注意しながら叱る。	66
叱る時間が短い。	48
気づきを促すような質問をしながら叱る。	42
生徒の話を聴いてから叱る。	40
厳しい口調で叱る。	38
丁寧な言葉遣いで叱る。	34
「～しなさい。～するな。」といった言い方で叱る。	32
感情的に叱る。	24
本人の過去の失敗や問題行動を持ち出して叱る。	10
言い分を聴かずに叱る。	6

表3 生徒のどのような言動に叱るか

生徒の言動	(%)
人を傷つける言動。	64
授業中の私語や妨害。	20
ルールや約束を守らない。	16
周りに迷惑をかける言動。	12
危険な行動。	12
嘘をつく、ごまかす等自分に向き合おうとしない。	10
指導無視（指示を聞かない）。	8
言葉遣いが悪い。	6
ものを大切にしない。	4
自分の役割ができない。 学校生活をいい加減にしている。 社会にでて困ると感じた言動。	2



カウンセリングの技法を織り交ぜた対応について難しく感じることやその難しさに対する工夫

教師がカウンセリングの技法を織り交ぜた対応をするうえで難しく感じることとして、教師の思いが本当に生徒に伝わっているのかという「不安感」や教育相談の技法を活用すると「時間がかかる」、すべての生徒に「一貫した指導」ができるのかについて分類した（表4）。

また、生徒に指導する時の工夫について、教師は日頃から「管理職や他の先生と連携し、組織的に対応する」、「叱ることができる人間関係の構築」といったことを行っている。また、叱る時は「ウルトラマン（3分程度で伝える）」を意識して対応したり、「今から自分は何ができるのか？」をいくつかの選択肢を示して一緒に考え、これからの自分をイメージさせるといった例もあった。

表4 教育相談の技法を織り交ぜた対応について難しく感じること

不安感	<ul style="list-style-type: none"> ・叱ることで本当に生徒が行動だけでなく、心からかわるのかと疑問を感じることがある。 ・叱ることは大切だが、生徒の心に響くにはどうしたらよいか。 ・同じことを何度言っても効果がない ・生徒に気持ちが伝わっているか不安に感じる。
時間がかかる	<ul style="list-style-type: none"> ・叱ることには何らかの理由があり、よく聞き取ったあとに叱る行為になるはずだが、教育相談の技法を使うと時間がかかると同時に素直でない生徒には問題の本質を変えられる恐れがある。 ・生徒が悪かったところを自分で気づかせるように話をすすめてもうまくいかず教師から答を言ってしまう。 ・自分を振り返らない生徒を振り返らせることの時間、体力、根負けをしてしまう。丁寧に行う余裕がない。
一貫した指導	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ言葉でも男子・女子の違い、関係が構築できている・できていないで一律に指導できない。 ・成育歴や生活環境が違うので同じ指導ができないことがある。 ・ベストな方法がないこと。

生徒を叱った後のフォローと「こうすればよかった」と思った事例

生徒を叱った後、ほとんどの教師がフォローをしているが、一方でフォローをあまりしない教師もいることがわかった（図4）。叱った後のフォローについての具体的な方法としては①叱ったことを引きずらず気持ちを切り替えて普通に接するが48%、②改善された（できるようになった）ことはしっかり褒めるが42%、③積極的に声をかけるが22%、④生徒の長所や頑張りを評価して指導を終わるが10%であった。また、「生徒の表情を見ながら臨機応変に対応する」、「行為を叱って生徒自身の人間性は否定していないことを伝える」、「生徒の成長を長期的にみていく」といった意見もみられた（表5）。

叱った後で「こうすればよかった」と教師自身が反省することでは「感情的な指導」、「生徒の思

いを汲み取る指導」,「指導方法」に分類できた(表6)。「感情的な指導」では「言葉遣いに気をつければよかった」,「感情的になると後悔することが多い」という回答があった。また,「生徒の思いを汲み取る指導」では,「生徒の話聞かず,表面だけを叱ってしまい,もっと話を聞いてやればよかった」,「生徒が自分を守るために嘘をつく時,冷静さを失って一方的に自分の思いを言っても生徒に響いていないことがあり,安心,信頼感のもとに生徒と話していくことが大切だと思った」という回答があった。「指導方法」については,「生徒自身に気づかせる指導」,「具体的な例を挙げたの行動指標を示す」といった生徒自身で主体的に考えさせる指導方法や「逃げ道をつくらぬ叱り方をしてしまうと生徒がしんどくなった」,「自尊心が強い生徒を大勢の前で叱った時」といった生徒の気持ちを考えていなかった指導,「言い方が悪かったのか」と教師自身の指導についての悩みがあることがわかった。

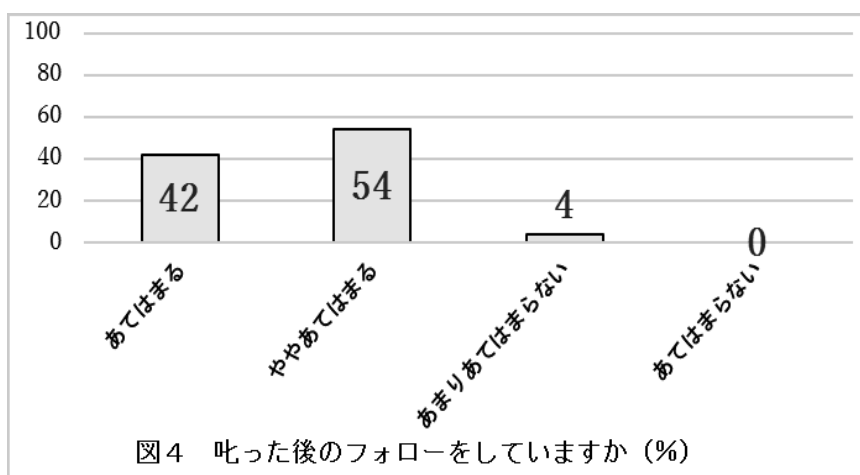


表5 叱った後のフォローの方法

フォローの方法	(%)
叱ったことを引きずらず気持ちを切り替えて普通に接する。	48
改善された(できるようになった)ことはしっかり褒める。	42
積極的に声をかける。	22
生徒の長所や頑張りを評価して指導を終わる。	10
生徒の表情をみて臨機応変に対応する。	2
行為を叱って生徒自身の人間性は否定していないことを伝える。	2
生徒の成長を長期的にみていく。	2

表6 叱った後、「こうすればよかった」と思った事例

カテゴリー	主な事例
感情的な指導	<ul style="list-style-type: none"> ・感情的に叱ったこと。冷静に叱ればよかったとも思うことがあった。 ・言葉遣いに気をつければよかった。 ・感情的になるのは仕方ないと思うが、感情的になると後悔することが多い。
生徒の思いを汲み取る指導	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の話をしっかり聞かず、表面だけを叱ってしまい「実はこういう事情が…」ということがあった。もっとじっくり生徒の話を聞けばよかった。 ・生徒が自分を守るために嘘をつく時、冷静さを失って一方的に自分の思いを言っても生徒に響いていないことがある。まずは騙されたフリをして言い分を聞き、「聞いてもらえる」という安心、信頼感のもとに生徒と話していくことが大切だと思った。
指導方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が言わせたいこと（悪かったこと、謝罪の気持ち）を誘導するのではなく、「なぜ、いけなかったのか」を生徒自身に気づかせる指導をしたい。 ・「こうすればよかった」と具体的な例を挙げる等の行動指標を示すことができればよかった。 ・教師の意図が伝わらなかった時に「言い方が悪かったのかな」と思う。 ・褒めることがあった後に叱るというつながりを作っておけばよかった。 ・逃げ道をつくらない叱り方をしてしまうと生徒がしんどくなった。 ・「頑張ろう」というアバウトな声かけより具体的に本人ができそうな改善点を丁寧に話してやればよかったと思うことがあった。 ・自尊心が強い生徒を大勢の前で叱った時。

考察

本研究では、中学校教師を対象としたアンケートで教育相談の場面での具体的な対応と指導の場面の「叱る」ことについての実態調査を行い、カウンセリングの技法を活用した「叱る」ことの難しさについて考察した。

教育相談の場面での対応と効果的な事例

教師は教育相談の場面でカウンセリングの技法を活かして相談にあたっていることが示され、「日頃からの教師と生徒の信頼関係の構築」や「話しやすい雰囲気づくり」、「受容・傾聴・共感的理解」を行うことによって教育相談を効果的に進めていることが明らかになった。一方で、教育相談では話をしっかり聴いているが、不適応行動について生徒を叱った時に「生徒の話をしっかり聞けばよかった」、「聞いてもらえるという安心、信頼感のもとに生徒と話をしていくことが大切だと思った」と振り返ったという意見もあった。これらのことから、教師は「叱る必要がない」場面では教育相談を行う時に活用する「受容・傾聴・共感的理解」といったカウンセリングの技法を活用して対応

しているが、「叱る」時、いわゆる指導モードになるとカウンセリングの技法を活用していないことが推察される。つまり、教育相談の場面ではカウンセリングの技法を活用して対応するが、叱る場面ではカウンセリングの技法は活用することが難しく、また、役立つと考える教師が少ないことが示された。

日常における「褒める」、「叱る」場面とその方法

「褒めること」、「叱ること」は日常の学校生活では必ずあることであるが、褒める回数の方が圧倒的に多かった。教師は生徒の自尊感情を育て、生徒の自己有用感を育み、生徒を認めるために褒めている。また、すべての教師が毎日必ず生徒を褒めていることが明らかになった。一方で、叱ることについてはほとんどの教師が1週間に1回以上行っており、特に10回以上叱っている教師が全体の3分の1を占めていた。このことから、教師は生徒の間違った行動にはその時その場で指導をしていることがわかった。また、教師の生徒への関心の強さも示された。生徒の言動に積極的に関心を持つことは教育の原点であるが、何らかの関心がないと褒めたり叱ったりすることができない。その中で教師は生徒の言動について、良いことはしっかり褒め、指導すべきところは毅然とした指導をして生徒の成長をサポートしている。また、「褒める」、「叱る」について意図的な配慮をしている教師の割合が高かった。特に個別に呼んで指導することが多い理由としては、「子どもの自尊感情を傷つけない」といった配慮や暴力行為など生徒指導上の課題に対する別室指導等が考えられる。

教育相談と「叱る」ことの関係

また、「教育相談の場面で生徒を叱ってはいけないと思う」についての回答がほぼ50%に分かれた。「カウンセリングは叱ってはいけないものである。だから、カウンセリングの技法を活用する教育相談では叱ってはいけない」のように、教育相談における「受容・傾聴・共感的理解」と生徒指導における「叱る」ことは相容れないものと考えている教師が多いことが推察される。また、教育相談の場面で叱ってはいけないことについて「あてはまらない」と考える理由として「生徒の話はじっくりと聞くが、その話の中で間違った言動について自分自身を見つめさせるためには叱ることも必要である」と認識している。また、男女別では男性教師で「教育相談の場面で生徒を叱ってはいけないと思う」について「あてはまる+ややあてはまる」が66.7%であったのに対し、女性教師では「あまりあてはまらない+あてはまらない」が73.6%であった。特に、教職経験21年以上の教師の中で男性教師（全31名中教職経験年数21年以上15名）は「あてはまる+ややあてはまる」が72%であったのに対し、女性教師（女性19名中教職経験年数21年以上9名）では「あまりあてはまらない+あてはまらない」が78%と対照的な結果であった。この結果から経験年数の長い男性教師は、教育相談では「生徒の話を聴き、生徒を受容することであり、生徒指導のように叱ると話をしなくなるのではないかと。まずは話を聴くことを重視し、指導すべきことがあるなら後からする」のように、相談と指導は分けて行うものであると考えるのに対し、女性教師は「生徒を受容しながらでも、わがままな言動や間違った考えにはその場で指導しないといけない。時には叱ることも必要なのは」のように相談の中で指導も行う必要があると考えるところがある。また、男性教師は「叱るとは厳しく指導すること」と考えやすいのに対し、女性教師は「相談の中で教え、論していくことも叱ることである」といった「叱る」ことのイメージに性差があることも推察される。

カウンセリングの技法を織り交ぜた対応について難しく感じることやその難しさに対する工夫

叱る場面にカウンセリングの技法を使うと「時間がかかる」という意見があった。このことは、「叱る」行為は生徒の間違った行動に早期に気づかせ、変容させるために行うことであるが、カウンセリングは時間をかけて話を聴き、相手を「受容・傾聴・共感的理解」することによって悩みを解決していくものと教師が認識していることが推察される。したがって、早期に対応しなければならない問題行動について、カウンセリングの技法では生徒自身が「何が間違った行動だったのか。今後、どうすればよいのか」を気づかせるには時間がかかるのではないかと判断し、叱らなければいけない状況ではカウンセリングの技法はふさわしくないと考えるためではないかと思われる。

また、なかなか生徒の変容が見られない時に教師自身は自分の指導方法に不安を持つことがわかった。教師は「何とか生徒自身が問題に気づいて変わって欲しい」と思って指導するが、同じ指導でもうまくいく場合とそうでない場合があり、よりよい方法がないことに教師は悩むことがある。このような悩みを解決するために、教師同士の情報交換や組織的で一貫した教育相談体制の確立が重要になってくるのではないかと思われる。

生徒を叱った後のフォローと「こうすればよかった」と思った事例

「叱る」ことは生徒の不適応行動や人を傷つける行為、迷惑をかける行為について毅然とした指導の一つである。しかし、その中で「感情的に叱り、冷静に叱ればよかった」、「感情的になると後悔することが多い」という意見もあった。この「感情的に叱る」は「怒る」という言葉に言い換えられそうである。生徒も何らかの指導を受けた時、「先生に怒られた」という表現をすることが多い。山中（2012）は「叱るというのは行為を表す言葉であり、これに対して怒るというのは感情を表す言葉である」と述べている。つまり、怒るとは怒る側(自分)の感情をぶつける行為であり、叱るとは叱られる側（生徒）の行動の変容を求める行為である。また、注意やアドバイスを取って語気を強めて相手に伝え、同じ間違いを繰り返さないようにする行為が「叱る」である。例えば、人を傷つける言動に対して教師は迅速で毅然とした指導が求められる。しかし、迅速な指導が求められる時に「生徒の話をしっかり聴く」という対応をすれば、聴くことに時間がかかり、解決で遅くなるのではという不安をもつ教師もいる。しかし、叱ることにより、指導を受けた生徒が自分の間違った行動に気づき、何がいけなかったのかを自分自身で振り返り、そして、同じ過ちを繰り返さないためにどうすればよいのかを考えさせるといった行為は、教育相談と生徒指導の共通点であると考えられる。そこで、教師は、生徒自身が問題に気づくための明確かつ具体的に伝える叱り方の工夫や努力が必要である。そして、このような叱り方は、生徒を正しい方向へ指導する上で重要であると思われる。

一方、叱った後、ほとんどの教師は生徒にフォローをしていることが示された。生徒にとって「叱られた」時は気分が沈みやすい。そのため、教師は何らかのフォローをすることによって生徒に「安心感・信頼感」を持たせることを意識していると考えられる。このことは、教師と生徒の信頼関係の構築に必要なことであると思われる。

総合考察

本研究の成果

本研究では、実際の「教育相談」と「生徒指導」の場面について、教師の難しく感じることと工夫の実態を明らかにすることができた。教師は生徒の話をしっかり聴き、受容的な態度で教育相談を行おうとしていることが明らかになった。そして、生徒のストレスや悩みを軽減させ、対処方法を生徒自身に身につけさせるために日常のあらゆる場面で様々な方法で教育相談を行っていることがわかった。

教師が生徒を褒めたり叱ったりする時の配慮やどのような言動に対してどのような方法で叱っているのが明らかになった。褒めることによって自己有用感を高め、一方で許されない行動については毅然とした対応をするという生徒と適切な距離感を持ちつつ、個人または集団の教育的効果を考えながら指導していることがわかった。また、教育相談で生徒を叱ってはいけないことについて「相談」と「指導」という点で教師も意見がわかれることが示された。男性教師は「相談」と「指導」をわけて生徒に対応するという考えが多い一方で、女性教師は「教え、諭すこと」も叱ることになるとらえ、「相談」と「指導」を融合させて対応するという考えが多いことがわかった。ここには「叱る」という行為についてのイメージの違いが存在すると思われる。

さらに、教師が「叱る」ことについて難しく感じることや工夫が明らかになった。特に「叱る」ことの悩みについては感情的になってしまうことが多かった。人間であるから感情的になることは仕方ないと考えられるが、「怒る」と「叱る」の違いを明らかにし、教師は生徒を「支援」という観点から叱らなければならないと思われる。

以上のことから、教育相談を効果的に行うことと生徒を指導するための「叱る」ことの効果を上げるためには、日頃の信頼関係の構築が必要であるといえる。例えば、効果がみられた対応として「休憩時間にできるだけ声をかけるようにしている。中でも目立たない生徒には積極的に声をかけることを意識している」といった意見があった。このように日頃から生徒とコミュニケーションを積極的にとることによって、生徒が「相談しやすい」、「叱られても不満を感じない」と思うようであれば、教師に積極的に相談したり、教師の指導が入りやすくなるのではと思われる。また、ほとんどの教師が教育相談の場面ではカウンセリングの技法を活用して生徒の話を聴き、生徒の自己有用感を高めるためにしっかり褒めているが、叱る場面ではカウンセリングの技法をあまり活用していなかった。そのため、指導した後で「もっと話を聴けばよかった」と考えてしまうことになるのではないかとと思われる。教師が生徒を叱る場面では生徒にも何らかの言い分がある。その言い分をしっかり聴くことが生徒の「怒られた」という思いだけで終わらないことになるのではないかと考えられる。また、「話を聴いてもらった」という安心感から教師の指導を素直に聞き、自分自身を振り返ることができるのではないかと考えられる。つまり、叱る場面でも生徒の話を存分に聴くことは大切なことである。そして、この「話を聴く」という行為が日常の教育相談の場面で活用しているカウンセリングの技法の基盤にある。したがって、叱る場面でもカウンセリングの技法を活かした指導が効果的であると考えられる。さらに、「生徒の話をしっかり聴く」、「生徒を褒める」等は生

徒の自尊感情を高める上で非常に重要であり、これらの内容を含んだ研修はあるが、「叱り方」の研修はない。この点から本研究で得られた成果は貴重であるといえる。

教育現場への提言

①校内研修の充実

本研究により明らかになった、教育相談と「叱る」ことの関係、生徒を叱るうえで教師がカウンセリングの技法を活用した時に難しく感じることと工夫等の課題を解決するために、校内研修を行う必要がある。これらの資料を校内研修の中で活用し、教師が教育相談の場面で意識的に行っているカウンセリングの技法を「叱る」場面にも活かすことによって生徒指導の効果的な取組や工夫について教師全体で意見交流を行い、組織的で一貫した教育相談体制及び生徒指導体制の確立に有効であると考えられる。また、教育相談や生徒指導で意識していることや効果的であった事例を共有することによって各教師がスキルを習得することについても校内研修を定期的に行うことが大切である。

一方で、アンケートより効果的な叱り方の事例がすべての生徒に対応できることはない。そこで、生徒実態や教師と生徒の人間関係を考慮し、効果的な教育相談や生徒指導が行えるよう、教師同士、教師と保護者、地域、関係機関と情報共有を日常からできている教育相談体制の見直しと構築が必要である。

②保護者への周知

「どのように叱ればよいかわからない」と子どもへの指導に悩む保護者が多い。そこで、本研究の内容を学校通信や生徒指導通信を計画的に発行し、啓発を行う。周知の際には保護者が子どもを叱らなければならない場面での声かけや留意すべき点等について、保護者がやってみようと思うような具体的な方法を提示する必要があると思われる。

③他校への普及

本研究で、調査対象となった学校は所属校を含め市内の中学校3校であったが、得られた成果は市内の各中学校はもちろん、各小学校においても参考になると考えられる。「叱る」ことによって叱る側の愛情が伝わらないといけないし、もし、伝わらないと反発や無視等の逆効果となる。そこで、各学校の教師や保護者が避けて通ることができない「叱る」という行為について情報交換や連携をすることによって児童生徒の自尊感情を高める指導力の向上が期待できる。

今後の課題

本研究では教師へのアンケートのみであったため、生徒の思いについては調査していない。「教師は話を聴いてくれる」、「素直に反省する叱られ方」について生徒へのアンケートを行うと、教師の「話を聴いている」、「効果的な叱り方」の結果とは違ったものになる可能性もある。教師と生徒の両面から調査し、カウンセリングの技法を活かした叱り方について課題を発見し、より効果的な叱り方を模索していくことが今後の課題となる。

引用文献

- 福田美智子・名島潤慈（2011）. 文部科学省の『生徒指導提要』における「教育相談」の検討
山口大学教育学部附属教育実践総合学習センター研究紀要第 32 号
- 橋元慶男（2002）. 基礎から学ぶ学校カウンセリング 建帛社
- 牟田悦子（2007）. 生徒理解・指導と教育相談 学文社
- 文部科学省（2008 年）. 中学校学習指導要領解説（特別活動編） ぎょうせい
- 文部科学省（2010 年）. 生徒指導提要 教育図書株式会社
- 上地安昭・西山和孝（2003）. 「叱る」生徒指導—カウンセリングを活かす— 学事出版
- 山中伸之（2012）. できる教師の叱り方・ほめ方の極意 学陽書房